丹波焼の里 ミュゼレター

2019 spring summer vol. 25

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

丹波の手仕事　匠の技 11

信水窯　「茶陶」　市野 信水氏

兵庫県文化賞受賞　市野 元和氏

やきものの里 春ものがたり

～職人技に会いに行こう～

丹波焼の里の楽しみ方、色々

インタビュー

内田 鋼一氏

市野信水作　伊羅保茶盌　肩衝茶入　刷毛目水指

丹波の手仕事 匠の技 11

信水窯「茶陶」 市野 信水氏

1968年に、初代信水氏が現在の地に築窯したことから信水窯が始まりました。道路に面したギャラリーを通り抜けると広々とした庭が続き、茶室、工房、登り窯などが点在しており、心が安らぐ雰囲気を醸し出しています。初代が逝去された後、2002年長男である克明氏が三九歳で二代目信水を襲名されています。

克明氏は、京都で焼き物を学ばれ、約二年間清水焼の仕事をしていましたが、立杭に戻り父信水氏に師事しました。しかし「手取り足取りは教えてもろうてない。見て覚えた」と話されます。伝統工芸展や茶の湯の造形展などに出品し数多くの受賞歴があります。そして、日本工芸会正会員、丹波焼伝統工芸士などとして活躍をされています。

信水窯は、茶陶に専念していた先代の遺志を引き継ぎ、専ら茶陶を作り続けています。作陶するにあたっては「茶道はいろんなもんをちょっとだけ習った」と謙遜して言われますが、お抹茶を立てて振舞ってくださった手慣れたご様子は、ずいぶんお稽古をされたのではと推察しました。茶入れは穴窯で焼くが、袱紗（ふくさ）が引っ掛からないよう灰が被りすぎず、かといって景色が損なうほど滑らかにしてしまわないように。素材の見どころを考えて窯に入れる必要がある」と微妙な手加減が必要とのことです。そして、日常食器もお茶道具も使い勝手を考えて作るという点では同じと話されます。「茶碗であれば、立てやすさ、口当たり、手に馴染むことなどに気をつけている。たくさん作るが、数えるほどしか作品にならない。できたと思う瞬間は少ないなぁ」と言われます。土は、お父様が残されているものが土置き場に保管されてあり、大切に使っておられます。

これからの展望をお尋ねしました。「薪にこだわらんとこと思ってる。伝統を守りながら、新しい試みもしてみたい。目標があることが成長に繋がる。定期的に個展を開いたり、公募展にも出品をしていきたい。発表の場を持ちたいと考えている」と。また、「個展はしんどい。考えたら寝られんようになる」とも。それだけ真摯に取り組んでおられるのだと思われます。

現在は、ご長男やお弟子さんと共に年3回ほど窯焼きをされているそうです。「穴窯時代の焼き締めが一番好きで、焼きたいと思っている。丹波焼も時代と共に変わってきた。今の丹波焼が、いつか古丹波と呼ばれるようになってくるのかもしれない」とおっしゃった言葉が印象深く残りました。

信水窯　市野 信水
〒669-2135
兵庫県篠山市今田町上立杭4-3
電話　079-597-2344

文・佐藤 詩子　写真・迫田 隆

平成30年度　兵庫県文化賞受賞
市野 元和氏（省三窯）

丹波焼を代表する作家として、伝統的な素材・技法に現代的な感覚を加えた作品は国内外で高く評価。国内の陶磁器展への出展や北欧へ研究員として派遣されるなど国際的に活躍し、また、大学の教授として後進の育成にも尽力したとして「兵庫県文化賞」に市野元和氏が選ばれました。

「大好きな仕事を一生懸命やってきて、そのことに対して評価されるということは本当に幸せなことだと思います。これからも自分らしい作品づくりに取り組んでいきたい」と語られました。

この賞は兵庫県を活動の拠点とし、芸術・文化の高揚に貢献し、その功績が顕著な方に贈られるもので、今年度は他に岩松了氏（劇作家・演出家・俳優・映画監督）笑福亭鶴瓶氏（落語家）正井公華氏（創作紙工芸・ガラス工芸作家）吉見敏治氏（洋画家）の４氏。

これまでに丹波焼では、市野弘之氏（昭和34年）大上昇氏（平成11年）市野雅彦氏（平成23年）西端正氏（平成28年）の４氏が受賞されています。

平成30年度兵庫県技能顕功賞受賞
大上磯松氏（夢工房）
大上裕氏（昇陽窯）

平成30年度日本伝統工芸士会功労者表彰
市野信行氏（信行窯）

取材　迫田 隆

やきものの里　春ものがたり
～職人技に会いに行こう～

期間　２０１９年５月３日～５日
（最古の登窯の焼成は２日～４日）

「春ものがたり」は春の連休に行われる丹波焼の里のイベントで、「開放（オープン）工房」は丹波焼の窯元が職人の技術をお客様に見学していただいたり、体験していただくもので、丹波焼をより身近に感じることができます。

【開放（オープン）工房】レポート

窯元さんたちが焼成されているところに多くの人が見学されていて、色んな質問がとび、窯元さんが丁寧に答えておられました。「この窯はどのくらいもつのですか？薪はどの位必要ですか」「そうやね、これは大きな屋根もあるし、もつやろね。『最古の登窯』で１２０年もったからね。薪はね、最初はバーナーで炙るからね。２００束くらいかな近くで見てみる？」と薪を入れる横穴の蓋を開けると「おおー」と見学者の歓声が上がり、和歌山県から来られたお二人は「凄いですね。焼成見学は初めてです。窯の炎は迫力ありますね」滋賀県から来られた方は「よい体験でした。登窯で焼いた焼き物は癒やしがあって好きでぜひ焼成見学をしたかったので、本当に良かったです」

道具の使い方の見学をされていた方は「カンナの使い方を丁寧に教えてくださり、本当にオープンなんだなって思いました。趣味で陶芸をしているのですがとても勉強になり楽しかったです」

他にもいろいろな見学や作陶体験をさせていただける窯元があります。

是非一度、匠の技を間近に感じてみませんか？

窯元により、見学や時間を決めています。予約が必要な場合もありますので詳しくは陶の郷（０７９－５９７－２０３４）までお問い合わせ下さい。検索は「丹波焼」で。

取材　上田 智津子

最古の登窯焼成見学

窯元焼成見学

絵付け体験

丹波焼の里の楽しみ方、色々　パート１

丹波焼の里では、窯元さんのギャラリーや陶の郷や美術館以外でも、道路の敷石や橋の飾り、道路わきの干支の置物など丹波焼で出来た色々なものに出会えます。今回は、その中から橋の飾りの一つを紹介します。

立杭公会堂前バス停から上立杭交流館近くの駐車場に向かって少し歩くと、１９９０年の四斗谷川拡張工事で架け替えられた「ほとけ橋」の欄干を飾る４点の丹波焼の壺に出会えます。

架け替えられる前の「ほとけ橋」の下の河原では、二日洗いの儀式やお盆の送り火を流す行事が行われる、立杭の人々にとってとても神聖な場所でした。それで、新しい橋も、「ほとけ橋」の名前が引き継がれました。

この、橋の飾りを任された、「茶陶まるか窯」の先代故市野勝助氏は、丹波焼らしい焼き物ということで唐草貼り付け文の壺を作りました。

登窯での焼成では、毎回焼きの状態が同じではなく、その時々で色合いや形に微妙な違いが生じてしまうので、よく似た雰囲気のものを作るには、予備の品を同時に焼く必要があります。数年前、壺の水抜き穴が詰まり、溜まった雨水が凍り、壺が割れるという事故があった時、20数年前に作られた予備の品で置き換えました。どれが、最近になって付け替えられたものか、見つけられますか。

取材　植田 正実

源泉かけ流しの日帰り天然温泉
こんだ薬師温泉 ゆめもりの郷
緑に囲まれた広い露天風呂で
ゆったり、のんびり
農産物直売所、レストランも併設、
１日ゆっくりお過ごしください。

営業時間
AM10：00～PM10：00
（PM9：30 受付終了）
定休日 毎週火曜日（祝日は営業）
〒 669-2153
兵庫県篠山市今田町今田新田 21-10
TEL.079-590-3377
http://yume-konda.com/

2018年度著名作家招聘事業×テーマ展

内田鋼一展

― 時代をデザインする

内田　鋼一 氏

「著名作家招聘事業」を開催している兵庫陶芸美術館で、幅広く多彩な活動で注目を集める作家、内田鋼一氏にお聞きしました。

丹波焼の里の印象はいかがですか

産地としてはそんなに大きくないじゃないですか。だから、それで代々続いているところが中心で、外からの人が少ないので、ちゃんと守られてきているものがあるなって思いますね。丹波焼って、作られているアイテムの種類の数が、中世から考えても多いと感じます。

窯業高校の専攻科を卒業後、海外へ出られましたがそのきっかけは

小さい時から海外に興味があって、小学生ぐらいからずっと海外に行きたいと思っていました。やきものに限らず、日本にはない建造物であったり景色であったりと、いろんなものを自分の目で見たいというのがずっとあって、遅かれ早かれ行くつもりでした。専攻科のころから行っていたんですが、卒業してからは、ビザの関係で帰国しては、またすぐ出ていくようなことを繰り返していました。初めは韓国、それから東南アジア、インド、ネパールとかパキスタンとか中央アジア、それにヨーロッパ、アフリカとかですね。一番多いのは、タイとかベトナムとかが長くて、そこでは職人として賃金をもらって生活していました。

白丹波のコレクションは

丹波焼のこの地で展覧会をするということで、古いものを出してほしいということだったんですが、古い丹波焼というと白丹波ぐらいしか持っていないので。世界中の焼き物の中で一応、白い焼き物をコレクションというより資料的にいろいろ持ってはいるんですけど、その中で調べていけば調べていくほどどんどん白丹波の特異性というのが見えてきます。白化粧して器を作っている産地は韓国や中国や同じ日本の中でも、東北から山陰、九州・沖縄、東海地方もあるんですけど、その中では抜群のクオリティの高さで、技術的な部分も突出していると思います。それは造形・作る技術もそうですし、白化粧と合わせてそれを焼く技術も突出しているんですよね。有名な李朝の粉引きや、中国の磁州窯のものと比べてもすごいということです。僕の中で世界中のやきもので、どうやって作られたんだろうと謎に思うものが二つ三つあるんですが、そのうちの一つなんです。上手のものと雑器に近いものがありますが、どれも使われて経年変化をしているものが味わい深いですね。丹波焼の地元の方は、そこまで思っておられる方は少ないですね。他のものとの比較対照の中で、ちょっと異質だな、面白いなっていうのがあるから。丹波焼の地元の人からしたら、白丹波の中に絵付けがある方が高価だし、墨流ししてある方が面白い、染付している方が希少性があるとかいわれるのですが、逆に僕は、無地だから面白いと思うんで。フォルムだったり経年変化の表情を含めて。

レクチャーを終えて

陶芸って、唯一何もないところから構築していくって形を作っていく仕事なんで、大きな仕事だったらそれだけの材料を用意して、何もないところから作っていく。大きなものに立ち上げていく。やきものでは、無のところから作っていくことに醍醐味もあるし、そこに自然界の、乾燥であったり重力であったり、いろんな作用が関わりなく作っていかないといけないので、それをすごく計算しながら考えながら、そこに感覚をどんどん盛り込んでいって自分らしい仕事をしていくんですね。

陶芸をやっていくと、ほかの素材の仕事をやっていくにも、すごく良い。自分なんか、本当にものを作る基礎、基礎中の基礎を学ばせてもらった。技術的な基礎じゃなくて、ものを作り上げる基礎を。陶芸は、いろんな要素が入っているので、だから陶芸を学ぶってのは陶芸だけじゃなくていろんなものに有効なことだと思う。自然を利用しながら、そこに収縮とか乾燥とか、もう一つ焼成ってことが入り、全く別の物質に変えていく。そういうすごく単純で原始的なものだけどすごく奥が深いものが陶芸にはあると。学校でやっているつまらない作業もそうだし、勤めていてずっとやっている単調な作業もあるけど、どれも無駄にはならないと思います。

若い人たちへの提言をいただけたら

丹波焼って、やっぱり中世から続いていて、いろんなことをやってきているので、その流れで全く新しいものがあっても丹波焼だったら許されるだろうし、自由にこの地で作っていたら面白いのじゃないかと。丹波焼だからってやっちゃいけないことはないと思いますし。

あとがき

世界の窯業地を巡り、身につけた陶技を駆使しながら、生活に用いる器から、インテリア、建築とのコラボレーションなど、幅広く多彩な活動で注目を集める作家、内田鋼一氏を招いて、「著名作家招聘事業」でテーマ展「内田鋼一展―時代をデザインする」が開催されました。併せて1月19日20日の二日間にわたって、トークやデモンストレーション&レクチャーで、陶芸の魅力を語られました。

デモンストレーションでは、原土など土を変えて、茶碗や土瓶づくりの轆轤引きを披露してくださり、削りの作業では、道具を使わずに指だけで削り取るなど、先生ならではの豪快な技を見せてくださいました。大雑把に見えても、普段からその土ごとに、器の裏とか蓋の中とかその形に合った細かいところまで仕上げをされる技を見せていただき、効率よくシンプルにやっていくことの大切さを教えていただきました。

内田鋼一氏　プロフィール

1969 愛知県名古屋市に生まれる
1990 愛知県立瀬戸窯業高等学校陶芸専攻科終了
1992 三重県四日市市にて独立
1993 個展を中心に活動を始める
2006「陶芸の現在,そして未来へCeramic Now+」（兵庫陶芸美術館）
2010「茶事をめぐって―現代工芸への視点」（東京国立近代美術館工芸館）
2015「BANKO archive design museum」を開館（三重県四日市市）

取材・写真　迫田　隆

兵庫陶芸美術館 2019年度　展覧会の見ドコロ

JR「篠山口駅」より直通バスを4～5月、9～11月の土日祝日に運行予定
※ダイヤ等詳しくは兵庫陶芸美術館まで

●特別展のご案内

瀬戸ノベルティの魅力 －世界に愛されたやきものたち－

2019年3月16日(土)～6月2日(日)

愛知県の瀬戸で作られ、欧米をはじめとした世界に向けて輸出された、やきものの人形や動植物などの置物は「ノベルティ」と呼ばれ、海外の人々のくらしに彩りを添えてきました。
明治時代にはじまり、戦後に最盛期を迎えた瀬戸ノベルティは、ヨーロッパの17～18世紀風の衣装を身にまとった華やかで優雅な人形、ハロウィンなどアメリカ文化を題材にしたもの。さらに、可憐なエンゼル人形や、写実的な表現の動植物などさまざまな種類が作られました。
本展では、世界に愛された、色鮮やかで多彩な瀬戸ノベルティを紹介し、異国情緒あふれる、その愛らしい魅力にせまります。

丸山陶器株式会社　「エンゲージ」　1955年頃　横山美術館

恋する古伊万里 －かたちとデザインの魅力－

2019年6月15日(土)～9月29日(日)

佐賀県立九州陶磁文化館の“柴田夫妻コレクション”と同館所蔵の優品によって、江戸時代に生み出された伊万里焼を、そのかたちやデザインとともに紹介します。斬新な構図、闊達な筆使い、新奇な絵柄など、多彩な意匠を通して現代の感覚に通じる古伊万里の魅力に迫ります。

有田　「色絵石畳牡丹花唐草文変形皿」　1690～1730年代
佐賀県立九州陶磁文化館（柴田夫妻コレクション）

神業ニッポン 明治のやきもの －幻の横浜焼・東京焼－

2019年10月12日(土)～12月15日(日)

幕末から明治にかけて世界へと門戸を開いた日本は、欧米で開催された万国博覧会に陶磁器や漆器などの美術工芸品を出品し、それらはジャポニスムと呼ばれる日本趣味の流行の契機となりました。本展では、輸出品のため、国内に残されておらず、幻の陶磁器とよばれている横浜焼・東京焼に焦点をあて、当時の技術の粋を集めた華やかなやきものをご紹介します。

●テーマ展のご案内

Modernity & Elegance
－イギリス陶芸コレクション
バーナード・リーチ、ルーシー・リー、
ハンス・コパー、ジェニファー・リー

2019年6月15日(土)～9月29日(日)

当館が所蔵するイギリス陶芸コレクション。その代表格であるバーナード・リーチ、ルーシー・リー、ハンス・コパー、ジェニファー・リーの作品を一堂に紹介します。それぞれのアプローチから陶芸へと進み、世代も異なる4人の作品を通して、イギリス陶芸の持つ現代性（Modernity）と優雅さ（Elegance）を探ります。

ルーシー・リー　「鉢」　1980年代
兵庫陶芸美術館

丹波焼の世界 season3

2019年3月27日(水)～2020年3月22日(日)
[2020年2月25日(火)～3月6日(金)は休館]

2017年に日本遺産に認定された日本六古窯のひとつに数えられ、800年以上の歴史を持つ丹波焼。変化しながらも現在まで続く丹波焼の世界をお楽しみ下さい。

丹波　「灰釉釘彫梅鶯文徳利」　江戸時代中期
兵庫陶芸美術館（田中寛コレクション）

兵庫陶芸美術館　〒669 - 2135 篠山市今田町上立杭 4　電話：079-597-3961（代表）　HP　http://www.mcart.jp

イベント案内

◆丹波篠山さくらまつり

「見て、味て、観て、春のささやま」をテーマに、恒例の「春の丹波焼陶器市・銘木変木市」を開催します。篠山の和菓子や観光大使が丹波篠山茶でおもてなしする「お茶席」など、篠山ならではの地域の特性を活かしたイベントが盛り沢山です。

●期　間　4月6日(土)～7日(日)
午前10時～午後4時まで
●会　場　篠山城跡三の丸広場
●内　容　篠山城跡の桜（お花見弁当・地酒・特産品販売）
春の丹波焼陶器市・銘木変木市・お茶席・ステージイベント・ビンゴゲーム
▼問合せ　丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034

◆第13回「やきものの里　春ものがたり」

緑豊かな自然に囲まれた、やきものの里では、五感で楽しむイベントが満載です。窯元オープン工房、最古の登窯焼成見学、春霞コンサート、体験ワークショップ、お茶席、味楽市、スタンプラリーなどを開催します。

●期　間　5月3日(金・祝)～5月5日(日・祝)3日間
午前10時～午後5時まで
●会　場　立杭陶の郷、兵庫陶芸美術館、各窯元など

プレイベント　丹波焼「軽トラ市」4月28日(日)10時～16時

○立杭陶の郷・各窯元・最古の登窯
●内　容・グループ窯作陶展
（陶の郷アートギャラリー丹波）
5月1日(水・祝)～5月6日(月・祝)
・窯元オープン工房
5月3日(金・祝)～5月5日(日・祝)
・最古の登窯焼成見学
5月2日(木・祝)～5月4日(土・祝)
▼問合せ　丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034

○兵庫陶芸美術館
●内　容　お茶席・春霞コンサート・体験ワークショップ・特設味覚コーナーなど
5月3日(金・祝)～5月5日(日・祝)
▼問合せ　兵庫陶芸美術館
電話：079-597-3961

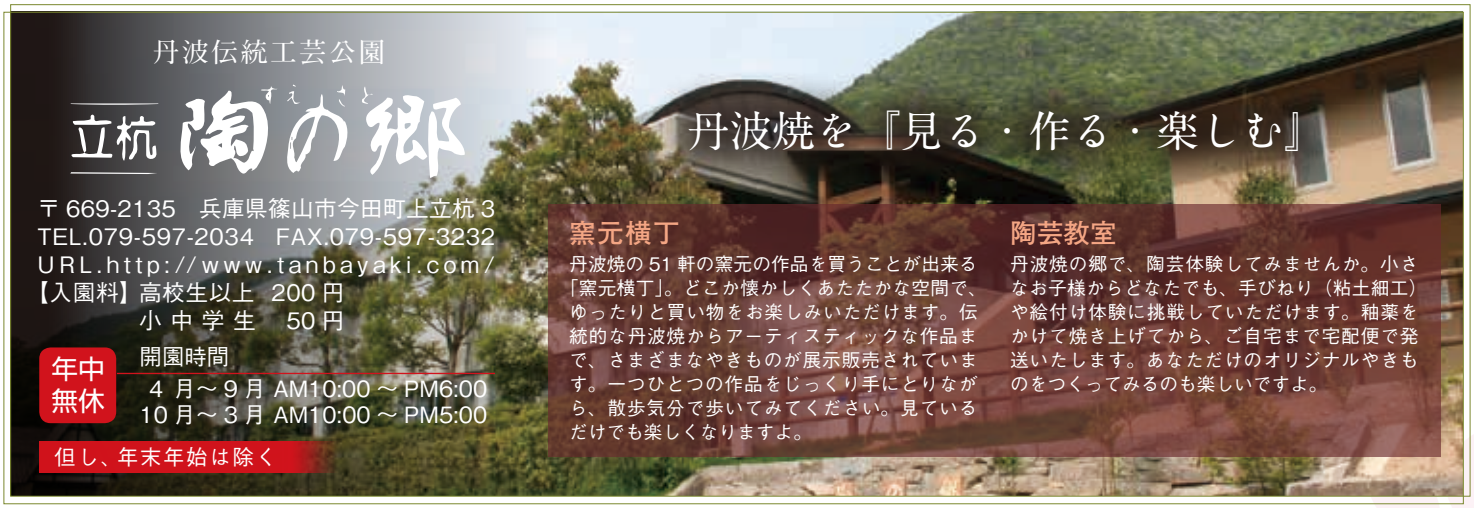
Event information

プレゼントのお知らせ

兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。

●応募方法
ハガキに　〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所（○○美術館など）・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。
●締め切り
2019年8月末日消印有効。応募多数の場合は抽選になります。
●宛先
〒669-2135
篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛

なお、ご応募頂いた方の個人情報は当選者への発送、本紙企画の参考以外の目的には使用いたしません。また当選発表は発送をもってかえさせて頂きます。



編集：陶芸文化プロデューサー　兵庫県篠山市今田町上立杭4 TEL：079-597-3961　平成31年3月1日発行（年2回春・秋季発行）